

(様式1)

「未来の担い手育成プログラム研究校」実績報告書(3年次)

1 学校名等

学 校 名	宇治市立黄檗中学校				校長名	市橋 公也	
研究教科・領域等	総合的な学習の時間及び全教科						
研究主題	主体的・対話的で深い学びの追究 ～「正解のない問い」に対する解決策を主体的・協働的に探究する生徒の育成～						
研究の目的	課題解決型学習 (Project-Based Learning) を通して認知能力・非認知能力を一体的に育成する。						
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合計	教職員数 ※校長・教頭を含む	
学 級 数	3	3	3	2	11	25	
児童生徒数	109	115	118	8	350		

2 研究校の概要

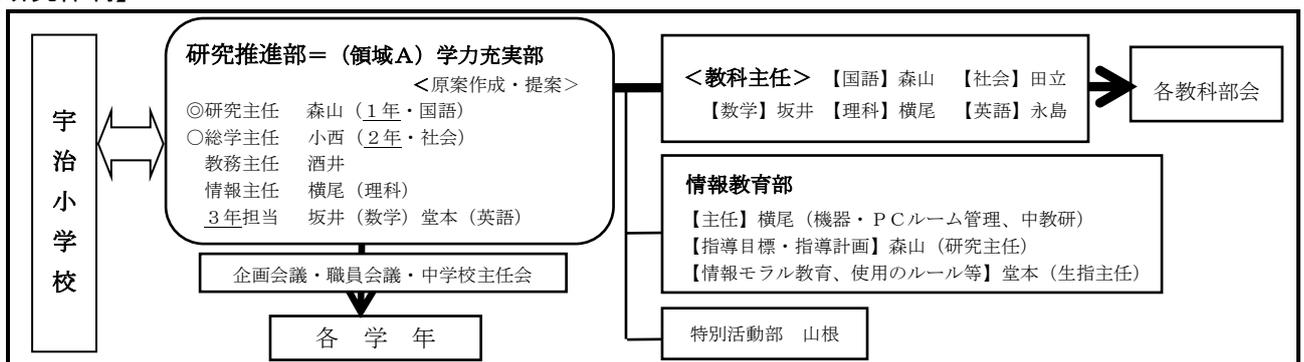
本校は平成24年度に開校した施設一体型小中一貫校で、黄檗中学校は今年度開校10年目を迎えた。全校児童生徒数1095名(小学校744名、中学校351名)で、施設一体型小中一貫校としては全国的にも類のない規模である。

開校4年目の平成27年度から29年度は、小中学校で文部科学省「外国語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、新学習指導要領を先取りし、「外国語によるやり取り」を重視した外国語教育の充実に取り組んだ。そして、令和元年度からの3年間は、中学校が「未来の担い手育成プログラム研究校」として、(株)祇園辻利と連携し、「課題解決型学習 (Project-Based Learning) を通して認知能力と非認知能力を一体的に育成する」研究に取り組んだ。指定3年次の今年度は、小学校が「絆の作り手育成プログラム研究校」の指定を受け、校区内の黄檗山萬福寺と連携し、課題解決型学習の手法を利用した学習をスタートさせた。

【認知能力】各調査の結果は、国語、英語ともにほぼ全国・府と同程度で、やや英語の学力が高い。数学(算数)については、小学校6年では全国・府と同程度であるが、中学校では低下傾向が見られる。本研究においては、令和元年度から3年間、全校生徒を対象にリーディングスキルテストを実施し、認知能力の伸長状況について検証した。

【非認知能力】異校種間交流が日常的に自然な形で行われ、小中学校の9年間で同一集団で過ごすことで他者理解が進み、生徒は中学生になっても子どもらしい素直さや優しさを持っている。男女の仲もよく、誰とでも抵抗なくコミュニケーションを図ったり協働したり自分の考えを表現したりすることができる。他校と比較して中学校進学時に不安を感じる児童の割合が少ない。一方、「自ら課題を解決する姿勢」や「自主的、自律的、計画的に学習に取り組む力」には課題が見られる。本研究では、全国学力・学習状況調査や京都府学力診断テストの質問紙調査に加え、2年次からは全校生徒を対象に独自の質問紙調査を行い、非認知能力の育成についての検証を試みた。

【研究体制】



3 主な研究活動

3年次は、1、2年次の取組の成果と課題を踏まえ、総合的な学習の時間を中心に「課題解決型学習」を深めた。各教科でも「課題解決型学習」に必要な力を高めるための指導を適宜取り入れた。

(1) 祇園辻利と連携した課題解決型学習と「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」出場

第2学年は、昨年度の課題を、①テーマが「自分事」になっていない、②課題の分析が浅い、③調べる量が圧倒的に少ない（仮説検証が不十分）と総括し、その課題を克服するために様々な仕掛けを工夫しながら今年度の指導を進めた。連携企業の出前授業を活用し、企業の持つ視点を生かす一方、様々な体験を通して生徒の当事者意識を高めながら、「世界中に日本茶を普及させるにはどうすればよいか」という課題に挑んだ。取組の成果は「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」で発表した。



昨年度末にオリエンテーションを行い、「課題解決型学習」の意義・目的を確認し、「PBL」という語を定着させた。年度当初から複数回祇園辻利の出前授業を行い、お茶を淹れて飲む体験をしたり、「企業理念」を聞いたり、Zoomで店舗の社会見学をしたりした。



Webや文献、外部講師や体験活動、フィールドワーク等、様々なリソースを活用して情報を収集し、複数の思考ツールを用いて課題を分析し、仮説を構築した。企画をアイデアシート、スライドにまとめ、アウトプットとブラッシュアップ・検証を繰り返した。



グループ間、クラス、学年での発表はもちろん、祇園辻利の社員の方々にブース発表したり、祇園辻利本社で中間発表会を行ったり、2・3年生で交流発表会を行ったり、様々なアウトプットの機会を設け、その都度フィードバックを行い、発表の質を高めていった。



出前授業で、新たな課題（社会に役立つ団体を設立する）について、2日でPBLをワンサイクル回すことにも挑戦した。「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」を前に壮行会を開くなど、最後まで学年全体で取り組み、学習の質を高めることができた。



(2) 第1・3学年の「総合的な学習の時間」における課題解決型学習

第1学年は「宇治の防災」、第3学年は「宇治市への提言」をテーマに課題解決型学習に取り組んだ。



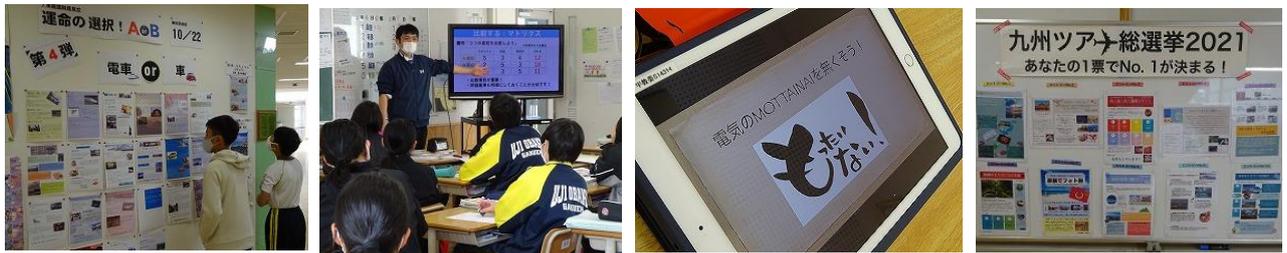
1年 防災プロジェクト中間発表

1年 防災意識を高めるための企画提案書

3年「宇治市への提言」学年発表会

(3) 各教科・領域における課題解決型学習につながる指導と評価

各教科・領域において、単元や内容のまとめりごとに課題を解決する学習や社会とのつながりを意識させる学習を推進し、単元ごとの多様なテストを充実させ、指導と評価の一体化を図った。



1年国語「論理的に説明する」
→ Pages を用いてレポート作成

1年国語 思考ツールの活用

1年道徳 ワンガリ・マータイ
「〇〇はもったいない」
解決策のプレゼン

2年社会 パフォーマンス課題
「九州ツアーの目玉プラン企画」

(4) 情報活用能力（ICT活用能力を含む）の育成

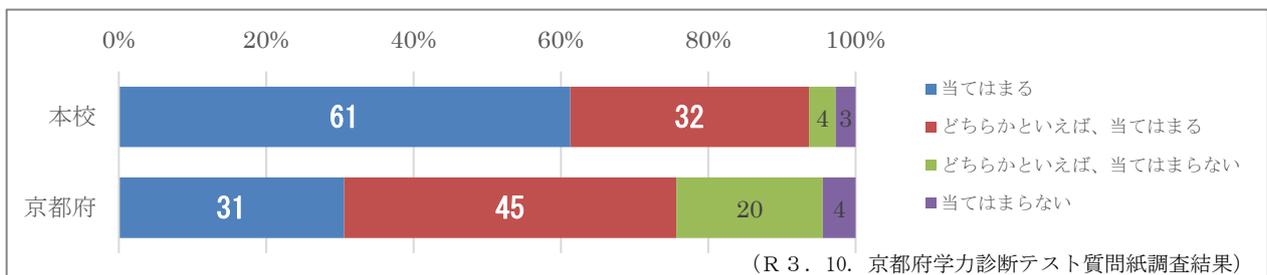
各教科、領域において1人1台のタブレット端末の活用を図り、ICTの基本的な操作スキルを高めるとともに、情報活用能力を育成した。

4 今年度の研究の成果と検証

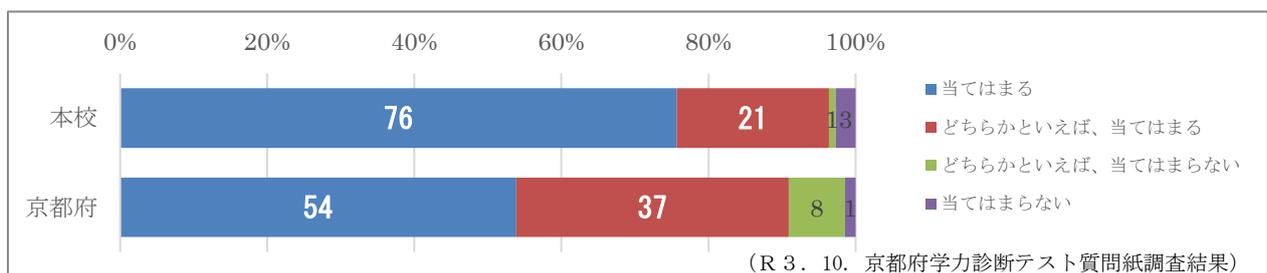
(1) 課題解決型学習の充実

生徒が学習の意義・目的を理解し、様々な体験や学びをつなげながら、学年全体で粘り強くより良い提案ができるよう取り組むことができた。実践が形式的なものにならず、生徒の学びを本質的に変えることができた。

①授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいる。



②授業では、みんなで話し合う活動をよく行っている。



< 2年生感想 >

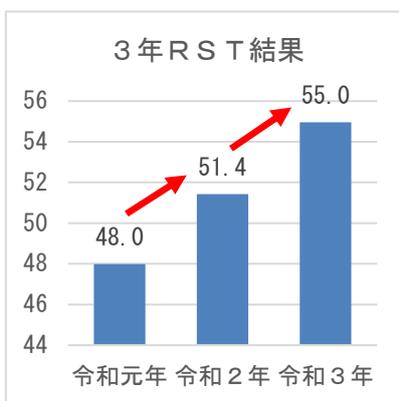
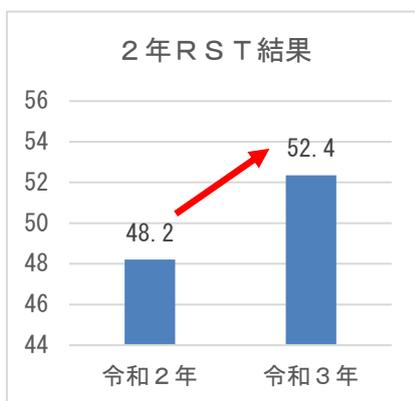
僕の学校では、総合で「課題解決型学習（PBL）」という、一つの課題に沿って、それぞれのチームが深め合い、解決策を出していくという学習をしている。僕はこの学習を実際に行っていると、自分が社会人で働いている気持ちになったりする。また、他人と意見を交流することで、その人の個性や考え方が分かったりもする。それを全校ですれば、さらに自分の考えも深まり、色々な人の意見もわかる。

PBL自体はまだ広く知られていないので、まずはそのような教育があることをどんどん知ってもらいたい。そして、中学生であっても、PBLなど大人の社会を学べるものを利用して、「本当に社会に出たときに大切なもの」を学ぶなど、これからの日本の教育が、子どもたちのそんな良い体験で溢れるようなものになってほしいと思う。

2学期はとにかく楽しい学期になりました。なぜなら総合の学習でPBLをすることがとてもおもしろくなったからです。前まであまり好きではなかったPBLを続けているとおもしろさに気付くことができたし、自分が必死に考えた解決策を認めてもらえる、うれしく、やりがいを感じられるようになりました。

最大の成長を感じたのはPBL活動です。今まで見ることのなかったお金のことや法律のことが問題として出てきて、「答えのない問い」を解決することの難しさについて学びました。

(2) 認知能力及び汎用的読解力の向上



全国の中中学生を母集団とするリーディングスキルテストの結果から、2年生、3年生ともに経年で汎用的な読解力の能力値・偏差値の伸びが見られた。リーディングスキルテストは、各学力テストとの相関が非常に高いことから、2年生、3年生ともに、経年で認知能力が向上したと言える。

(全国の中1～中3生徒を母集団とする結果の偏差値)

(3) ICT活用能力の向上

1人1台端末が整備され、各教科や領域でほぼ毎日端末を活用するようになった。「コンピュータを活用して情報収集ができる」と答えた生徒の割合は全校で91%、「コンピュータを活用してプレゼン（発表）資料を作成することができる」と答えた生徒の割合も84%にのびた。

しかし、これらの割合は、昨年度の調査からは若干減少しており、PBLの深化にともなって生徒の中で「できる」の基準が高くなってきているのではないかと考えられる。

5 今年度の課題

(1) 非認知能力の育成について

多くの生徒が課題に誠実に向き合い、仲間と協働しながら好奇心を持って課題解決に取り組み、フィードバックに対してもポジティブに粘り強くブラッシュアップを繰り返すことができたことから、課題解決型学習を通して論理的な思考力とともに様々な非認知能力も向上したという印象は強い。しかし、どのような非認知能力がどの程度伸びたかというところまで研究を進めることはできなかった。

(2) 評価指標の基準の明確化

情報活用能力や表現力など、客観的に見て能力が高まっていると思われる項目についても、生徒の自己評価が経年で低下する現象が見られた。教師からの適切なフィードバック、育成したい資質・能力の明確化と活動の目標・ねらいの生徒への明示、振り返りの重視、メタ認知能力の育成等が求められる。ICT活用能力、情報活用能力についても、指導内容を整理し、育てたい資質・能力を明確にして、生徒自身が客観的に振り返ることができるよう評価の基準を明示していく必要がある。

6 事業終了後の研究構想

来年度の研究課題を「教科横断的な課題解決型学習による論理的思考力の育成」とし、各教科・領域の学びをつなげる課題解決型学習を展開する。研究を指定期間だけのものに終わらせることなく、汎用性、再現性を高めながら継続して実施していくために、培ってきた実践の内容を精選、整理する。各教科・領域において課題解決型学習の手法を活かし、単元や内容のまとまりごとに目標とする資質・能力を育成することができるよう、授業改善と評価の改善を継続する。